上野市森寺

竹ノ下遺跡発掘調査報告

1985.3

三重県教育委員会

序

住宅団地造成などの民間企業による開発事業、広大な事業面積の圃場整備事業、道路改良及び河川改修など公共事業に伴う埋蔵文化財保護の問題は年々増加の傾向にあります。

三重県教育委員会では、各開発関係部局の事業計画を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてまいりました。今後ともなお一層、関係者への埋蔵文化財の理解と認識を深めていきたいと考えておりますので、広く県民の皆様方の理解と協力をお願いする次第であります。

ここに報告する竹の下遺跡発掘調査は、上野市の一級河川木津川改修工事事業(矢田川工区）の施工に先立ち、遺跡の概要を記録にとどめるため実施されたものです。発掘調査の結果、鎌倉時代以降の水田跡が検出されましたが、出土した遺物とともに地域の歴史を考える上できわめて貴重な資料であり関係各位の参考にしていただけるなら幸甚であります。

なお、調査にあたっては、上野土木事務所木津川改修工事事務所・上野市教育委員会・上野市下郡市民館をはじめ、地元森寺・下郡の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜わりましたことをここに深く感謝の意を表します。

昭和６０年３月

三重県教育委員会

教育長 横　田　猛　雄

例　　言

1．本書は三重県教育委員会が、県土木部から執行委任を受けて実施した一級河川木津川改修事業（矢田川工区）に伴う上野市森寺字竹ノ下に所在する竹ノ下遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は下記の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会文化課　　技師・吉水康夫

主事・仁保晋作

同　・上村安生

調査協力　上野市教育委員会

上野市下郡市民館

また、森寺・下郡の区長をはじめとする地元各位に協力を得た。

3．発掘調査後の整理、及び報告書作成は、上村が主として行なった。

4．本報告書における方位は全て真北を用いた。

5．実測図中の断面白ぬきは土師器、黒ぬりは須恵器、スクリーントーンは陶磁器である。

6．竹ノ下遺跡の遺跡略記号は６ＪＴＳである。

7.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の方法……1
Ⅱ　位置と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……5
Ⅲ　遺　　構……7
　1．A地区……7
　2．B地区……8
　3．C地区……9
Ⅳ　遺　　物……11
　1．弥生時代の遺物……11
　2．古墳時代の遺物……11
　3．奈良時代の遺物……11
　4．平安時代以降の遺物……14
Ⅴ　結　　語……14

図版目次

第1図　遺跡位置図……2
第2図　遺跡周辺地形図……3
第3図　発掘区平面図……4
第4図　A地区遺構平面図……8
第5図　A地区南壁断面図……8
第6図　C地区遺構平面図・南東壁断面図……9
第7図　出土遺物実測図……12
調査前近景……7
作業風景（C地区）……8
A地区水田跡写真（北東および北から）……10
出土遺物写真……13

Ⅰ　前　　言

1．調査に至る経過

一級河川木津川は、上野盆地の中央西よりをほぼ南から北へ流れ、服部川、柘植川が合流し京都府に下り淀川として大阪湾へと注ぐ。この木津川は、上野市下郡地内では洪水時に度々多くの被害をだしてきた。そこで、この地区の木津川左岸の拡幅及びそれに伴う集落移転、更に支流矢田川の改修等の一連の木津川改修事業計画がたてられ、昭和52年以来、県土木部・県教育委員会、上野市、同市教育委員会、地元との間で協議を重ね、昭和53年以来、下郡遺跡調査会、県教育委員会等により、下郡遺跡の発掘調査が行なわれてきた。

昭和58年11月には上野市教育委員会が、矢田川右岸の地域で、圃場整備予定地域の事前発掘調査を行ない竪穴住居などの遺構を検出した。昭和59年度には一級河川木津川改修事業（矢田川工区）の事業が計画され、遺跡分布調査により遺物の散布が認められた。事業予定地内に所在する竹ノ下遺跡の試掘調査を、昭和59年１月12日～14日に行なうこととなった。その結果、面的な調査を行なう必要があると判断された為、協議の結果、県土木部の執行委任をうけて、県教育委員会が事前発掘調査するに至った。調査は、昭和59年６月４日に開始し、同年８月16日に現場調査を終了した。

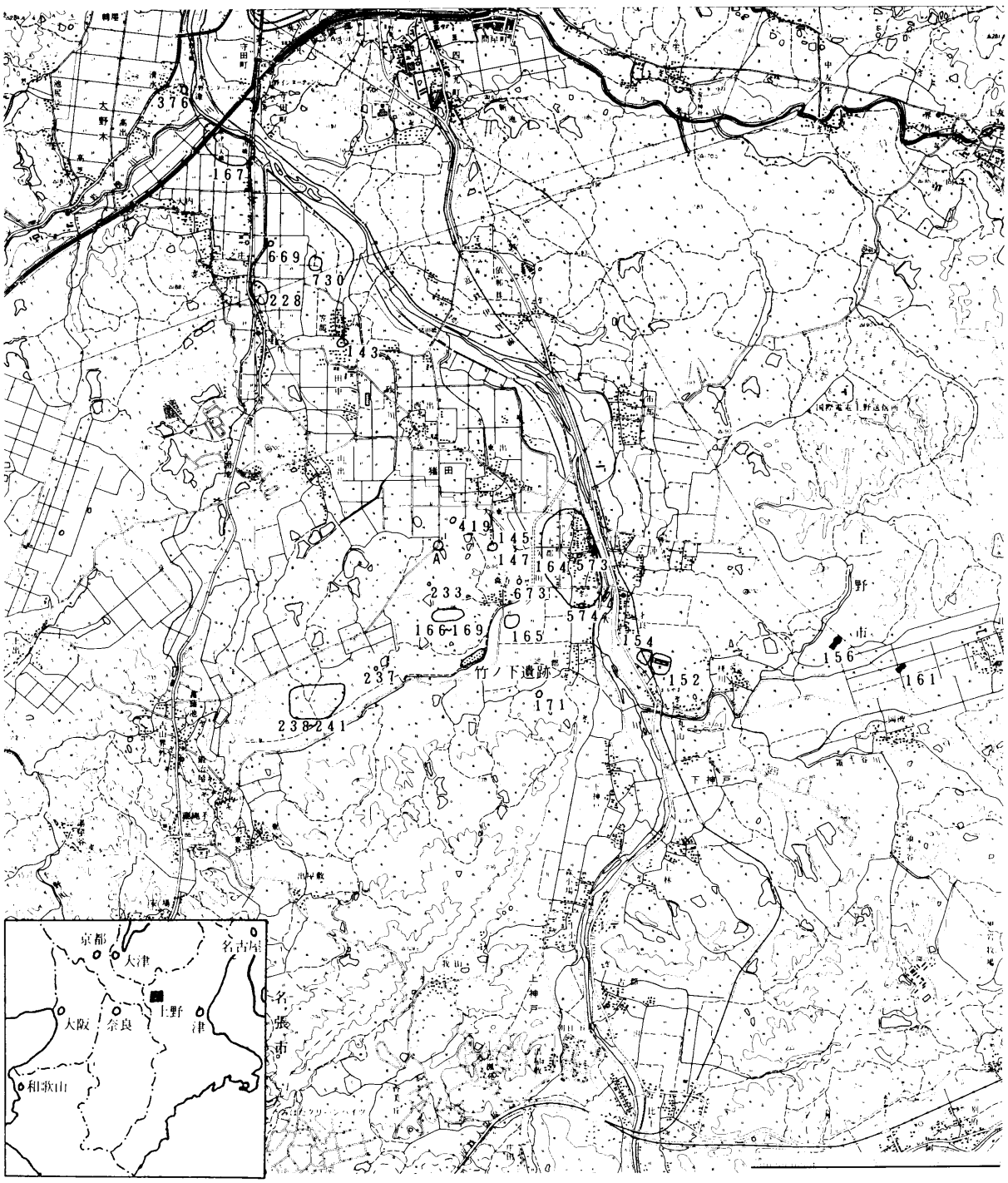
2．調査の方法

竹ノ下遺跡の調査は、当初の調査予定面積約3.000㎡をＡ・Ｂ・Ｃの3地区にわけて調査を行なった。Ｂ地区は、幅２ｍ×長さ70ｍ・幅２ｍ×長さ40ｍ・幅２ｍ×長さ10ｍを２本・幅２ｍ×長さ15ｍといった５本のトレンチを設定して行なったが、遺構は確認されなかったため、トレンチ調査のみで終えた。Ａ地区・Ｃ地区は、面的に広げて行なった。その結果調査面積は1350㎡となった。

Ⅱ　位置と環境

1．地理的環境

紀伊半島の中央北部に位置する上野盆地は、四周を山地で囲まれ、北は信楽高原、水口丘陵、東を鈴鹿・布引山脈、南を高見山地、西を笠置山地で画されている。盆地は、第三紀鮮新世の古琵琶湖が第四紀中期に陸化して形成されたと考えられており、東西約15km・南北約25kmの広さを有するが、盆地内には、丘陵・段丘・沖積低地が分布し、断層系の発達が著しい。盆地は、古生



第1図　遺跡位置図（1：50000）　（国土地理院　伊勢路・月ヶ瀬 1：25000）

228 北長野遺跡　143 田中遺跡　376 清水北遺跡　167 北掘池遺跡　164 下郡遺跡

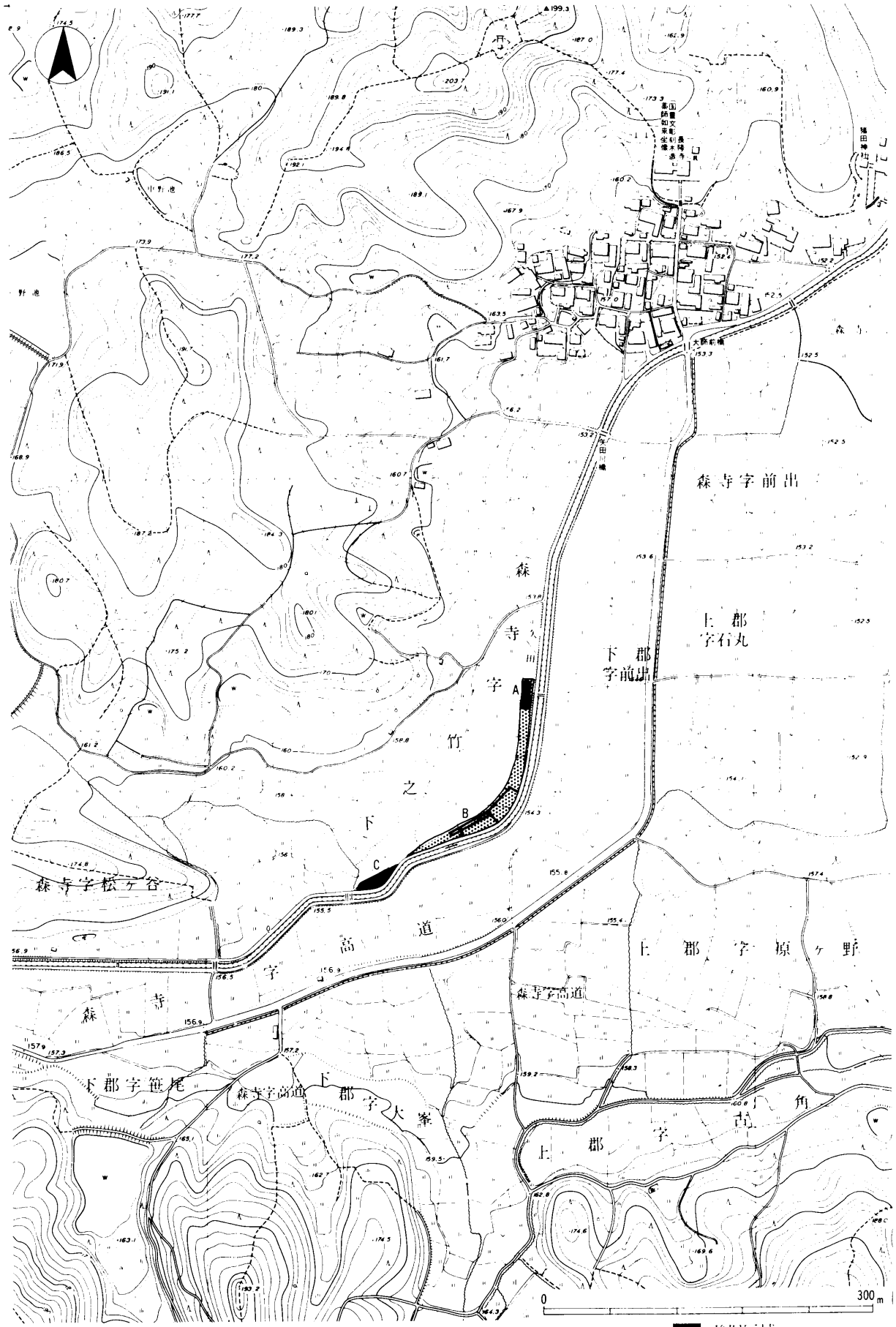
152 才良遺跡　669 山ノ川遺跡　165 森寺遺跡　156 石山古墳　161 王塚古墳

145～147 猪田神社古墳群　166～167 森寺古墳群　238～241 湯栗古墳群　171 上野1号墳

154 財良寺跡　419 彼岸台遺跡　*A 唐木谷遺跡　730 神部遺跡　233 夫婦塚池遺跡

237 湯栗窯跡　673 猪田経塚　573 加納氏館跡　574 石田氏館跡

* A唐木谷遺跡は遺跡番号未整理のためAとした。



第2図　遺跡周辺地形図（1：5,000）

発掘区域
遺跡範囲

層のホルンフェイス・領家帯の基盤岩類からなり、更にその上部に古琵琶湖層群が堆積し、標高200m～300mの丘陵を構成しており、上野市周辺では、古琵琶湖層群の最下層を形成する粘土砂・礫の互層からなる伊賀累層が発達している。この盆地の中央西寄りをほぼ南から北へ木津川が流れ、服部川・柘植川が上野市街北西で合流し、上野盆地の水を集め、京都府に下りやがては淀川として大阪湾へと注ぐ。①②

竹ノ下遺跡は、木津川の支流矢田川の左岸の沖積地に立地しており、標高は約155mである。周辺は水田地帯であり、圃場整備により区画整備が進んでいる。さらにその周囲を、標高約200mの低平な丘陵が囲んでいる。行政区画上では、上野市森寺字竹ノ下に位置している。上野市の南部にあたる地域である。

第3図　発掘区平面図（1：2,000）

2．歴史的環境

縄文時代の遺跡では、早期の押型文土器が、北長野遺跡（228）で表採されており[3]、前期の爪型文土器・玦状耳飾等を出土した田中遺跡[4]（143）や後期の清水北遺跡[5]（376）が知られ、他にも北掘池遺跡[6]（167）下郡遺跡[7]（164）・才良遺跡[8]（152）・木津川右岸の丘陵上などにも遺跡が知られている[9]。

弥生時代の遺跡では、前期・中期の遺跡の数は少なく、後期になると田中遺跡・才良遺跡・山ノ川遺跡[10]（669）・北掘池遺跡等が知られている。また、竹ノ下遺跡の北東500ｍには、木製長柄鋤、田下駄等の木製器が多量に出土した森寺遺跡[11]（165）があり、近年の調査により、さらに、矢田川をはさんだ対岸では、後期の竪穴住居も確認されている[12]。

古墳時代にはいると、比自岐盆地に全長120mをはかる前方後円墳石山古墳[13]（156）、全長約48mの王塚古墳[14]（161）があり、竹ノ下遺跡周辺では、猪田神社古墳群（145～147）・森寺古墳群（166～169）・湯栗古墳群（238～241）・上野１号墳（171）などが分布している[15]。

この時代の集落跡も近年の発掘調査により、しだいに明らかにされつつある。北掘池遺跡では古墳時代の初頭から後期にいたる竪穴住居が54棟確認され、さらに103枚の水田跡が確認されている[16]。竹ノ下遺跡周辺では、下郡遺跡が知られており、竪穴住居が２地点で確認されている[17]。

古墳の集中する地域は開発も古く、木津川両岸の沖積地に拓かれた耕地には、条里地割のなごりが認められ、式内社猪田神社[18]周辺の上郡・下郡・森寺等には整然とした長地型の地割が見られる。伊賀郡内の条里地割の方向は、木津川の流路により、めまぐるしく変わっており、下郡―上郡ではＮ2°Ｅである[19]。

また、木津川の右岸の才良には、財良寺跡（154）がある。八葉複弁の蓮華文軒丸瓦・唐草文に珠文帯を配した軒丸瓦等を出土しているが、規模や伽藍配置は明らかでない[20]。この寺の創建については、郡衙との関連で考えられており、『日本書紀』によれば、壬申の乱（672年）に際して、大海人皇子が伊賀中央部を縦断するが、この時、伊賀郡衙は焼かれたという。旧伊賀郡内で、現在「郡」のつく地名では、上野市古郡・上郡・下郡がある。通説では、大海人皇子に焼かれた郡衙の所在地を上野市古郡付近に、その後の郡衙は上郡・下郡付近に比定する[21]。下郡遺跡では、延暦銘をもつ木簡・緑釉陶器・志摩式製塩土器等の注目すべき遺物が出土している。一般的な集落跡とは異なるが、官衙と言い得る遺構は確認されていない[22]。また、下郡遺跡の北西600ｍの彼岸台遺跡（419）は、丘陵北麓段丘上にあり、奈良時代の土師器・須恵器・円面硯破片が出土している[23]。さらにこの遺跡の南西500ｍの唐木谷遺跡（Ａ）も前者と同じ立地で、出土遺物は、奈良時代も含むが平安時代が主で、須恵器転用硯や墨書土器がみられ[24]、共に官衙的性格がうかがわれる。その他にも奈良時代の遺物を出土する遺跡では、神部遺跡（730）がある[25]。また、竹ノ下遺跡北の丘陵に平安時代の夫婦塚池遺跡（233）、湯栗窯跡（237）が知られている[26]。

下郡の猪田神社の裏山には、多数の瓦製経筒を埋納する猪田経塚（673）が知られている。その営造の一時点は12世紀末葉と考えられている。[27] 猪田経塚の所在する旧伊賀国伊賀郡猪田郷は、天喜元年（1053）の左弁官下文[28]によれば、藤原道長の孫と伊勢神宮の荘園となっている。また、天喜四年（1056）の藤原実遠の所領譲状案[29]によれば、藤原実遠の一円支配荘園であったことが記されている。経塚の営造には、実遠以後に自立化する在地勢力の動向がうかがえるのではなかろうか。森寺には、国指定重要文化財で、定朝様式を伝える藤原中期の作とされる木造薬師如来坐像を蔵する長隆寺が所在する。[30] 本尊は、藤原前期の作とされる木造大日如来坐像であるが、猪田経塚から「大日」とヘラ描きされた経筒が1本出土しており、両者の関連には深いものがある。[31]

中世にいたると、土豪層の成長にともない中世城館が多く築造されている。18世紀中葉の三国地志[32]によれば、「郡村」に石田・加納・古郡三氏の宅跡の記載がみられる。そのうち、1976年におこなわれた中世城館の分布調査により、加納氏館跡（573）・石田氏館跡（574）が判明している。[33] また、1978年の下郡遺跡の発掘調査の際に城館跡が確認されている。[34] これらの中世城館も天正9年（1581）の織田信長の伊賀攻略によって、その基盤を奪われ、中世的秩序が解体され、幕藩体制の中に組みこまれていくのである。

註

① 福永正三『秘蔵の国』 1972
② 立命館大学地理学研究会『伊賀上野』 1975
③ 森川桜男「伊賀路の古代史（中）」『伊賀郷土史研究』 19
④ 沖島卯之・星野獣二・宇佐晋一「三重県上野市田中遺跡の縄文式土器」『古代学研究18』 1958
⑤ 吉村利男氏の御教示による。
⑥ 谷本鋭次・吉水康夫・駒田利治・山田猛『三重県上野市 北掘池遺跡発掘調査報告 第一分冊』 三重教育委員会 1981
⑦ 中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』 上野市教育委員会 1978
⑧ 宇佐晋一「三重県上野市才良遺跡概報」『古代学研究12』 1955
⑨ 上野市『上野市南部都市開発区域埋蔵文化財第一次調査報告』 1978
⑩ 谷本鋭次「上野市上ノ庄 山ノ川遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1979
⑪ 森川桜男「三重県上野市森寺発見の木鋤」『古代学研究14』 1956
⑫ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報14』 1984
⑬ 小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報1』 1948
小林行雄「三重県名賀郡石山古墳第二年度調査」『日本考古学年報2』 1954
小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」『日本考古学年報3』 1955
⑭ 山田猛「上野市岡波 王塚古墳」『昭和53年度県営圃場整備地域埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1979
⑮ 上野市教育委員会・上野市遺跡調査会『上野市遺跡地図1978年版』
⑯ ⑥に同じ
⑰ ⑦に同じ
⑱ 下郡所在の猪田神社である。
早瀬保太郎『伊賀史概説 上』 1973によると、式内社猪田神社は、下郡所在のそれと猪田所在のそれと二社があり論社となっている。前者は天正15（1587）年の、後者は大永2（1527）年の棟札を持つ 1979
⑲ ①に同じ
⑳ ⑧に同じ

㉑ ①・⑱に同じ
㉒ ⑦に同じ
㉓ 谷本鋭次「上野市上ノ庄彼岸台遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1979
㉔ 山本雅靖『唐木谷遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会　1979
㉕ 駒田利治「上野市笠部　神部遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
㉖ ⑮に同じ
㉗ 西嶋覚・山本雅靖『上野市教育委員会』1975
㉘ 『平安遺文』第 701号文書
㉙ 『平安遺文』第 763号文書
㉚ ⑱に同じ
㉛ ㉗に同じ
㉜ 藤堂元甫編『三国地志』　1763
㉝ 三重県教育委員会『三重の中世城館』
㉞ ⑦に同じ

Ⅲ　遺　　構

1．A　地　区

A地区の基本的な層序は、第Ⅰ層；耕作土，第Ⅱ層；床土，第Ⅲ層；黄灰褐色土，第Ⅳ層；黄灰色砂質土，第Ⅴ層；黄灰褐色粘質土，第Ⅵ層；暗灰褐色粘質土，第Ⅶ層；灰褐色砂質土である。A地区では、畦畔状遺構、土坑とピットが確認されている。土坑とピットは、発掘区北東で検出されたもので出土遺物はなく、第Ⅲ層より畦畔をきりこんでおり、比較的新しい時期のものと思われる。

畦畔状遺構

畦畔は南北軸で傾き約N15°Eをもち、南北にのびる畦畔と発掘区中央やや南よりで、この畦畔と直交する形で西へ分岐する畦畔とが検出されている。前者は、現存で長さ約22m（分岐点から北へ15m・南へ7m）、幅は上端面で40～130cm、下端で約100～240cmと差があり、北の方が狭いようである。後者は、上端面で150～200cm、下端で200～240cmと差がある。いずれも断面の形は、台形状を呈している。

この遺構の性格については不明な点も多いが、その形状等より水田跡を想定しておきたい。これらの畦畔は、水田耕作土と考える第Ⅵ層；暗灰褐色粘質土と何ら区別できないもので、時間的には、第Ⅵ層堆積終了後、区画内の土の削平、あるいは置土により築かれたもので、どちらかは区別できなかった。しかし、他所より違った

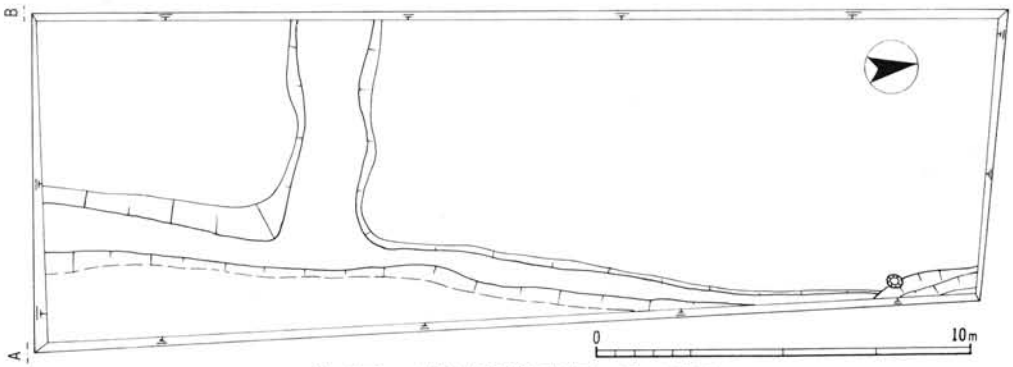
調査前近景

土をもってきて築かれたものではない。北側の水田面と畦畔上端面との差は、現状で11～18cm、南側水田面と畦畔上端面との差は、現状で３～７cmであり、南側の水田面の方が北側の水田面より高い。なお、南北にのびる畦畔の東側は旧地形のおちこみが深いため完掘しなかった。

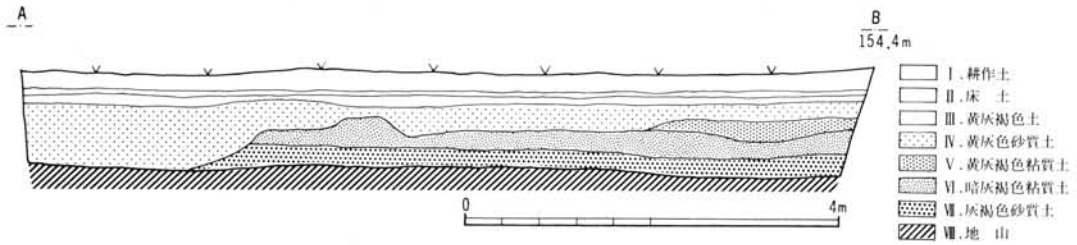
作業風景

２．Ｂ　地　区

Ｂ地区の基本的層序は、第Ⅰ層；耕作土，第Ⅱ層；床土，第Ⅲ層；淡灰褐色粘質土，第Ⅳ層；淡黄灰褐色粘質土，第Ⅴ層；灰褐色粘質土，第Ⅵ層；灰茶褐色粘質土，第Ⅶ層；灰茶色粘質土，第Ⅷ層；灰褐色砂質土である。第Ⅴ層以下が遺物包含層であるが前述のように遺構は全く確認されなかったためトレンチ調査のみで終った。遺物な、細片ばかりで弥生時代を上限として室町時



第４図　Ａ地区遺構平面図（１：200）

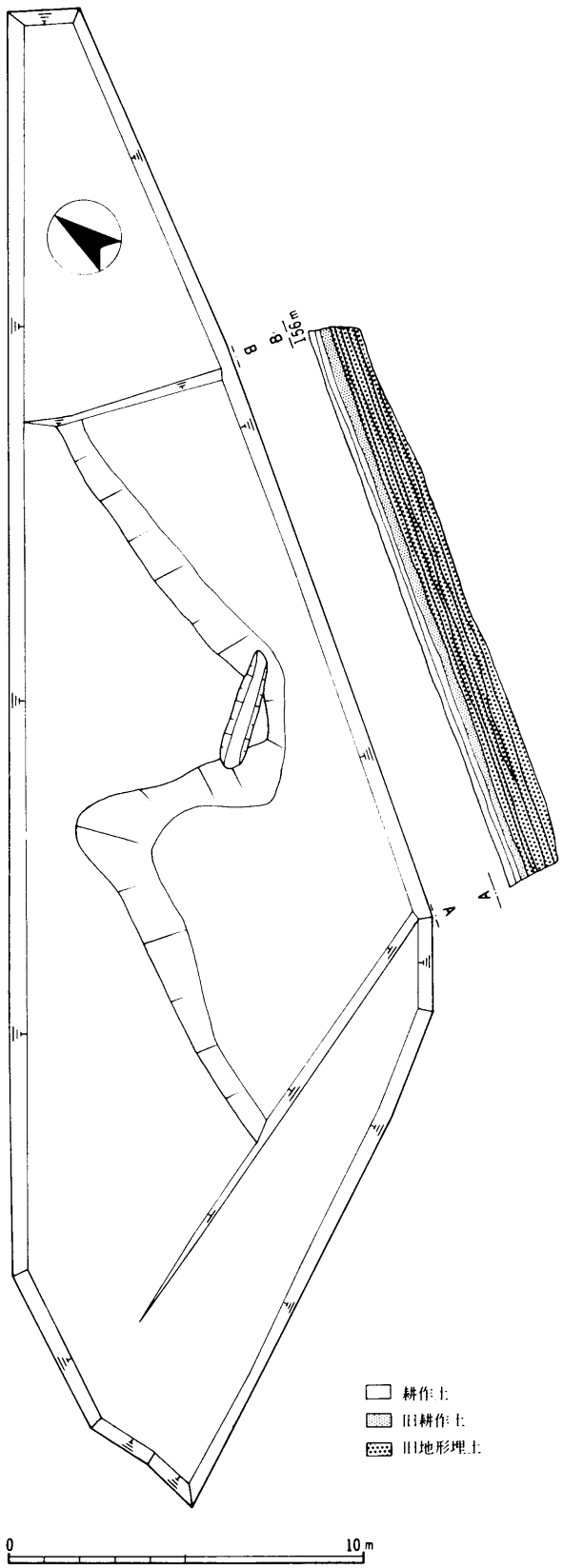


第５図　Ａ地区南壁断面図（１：80）

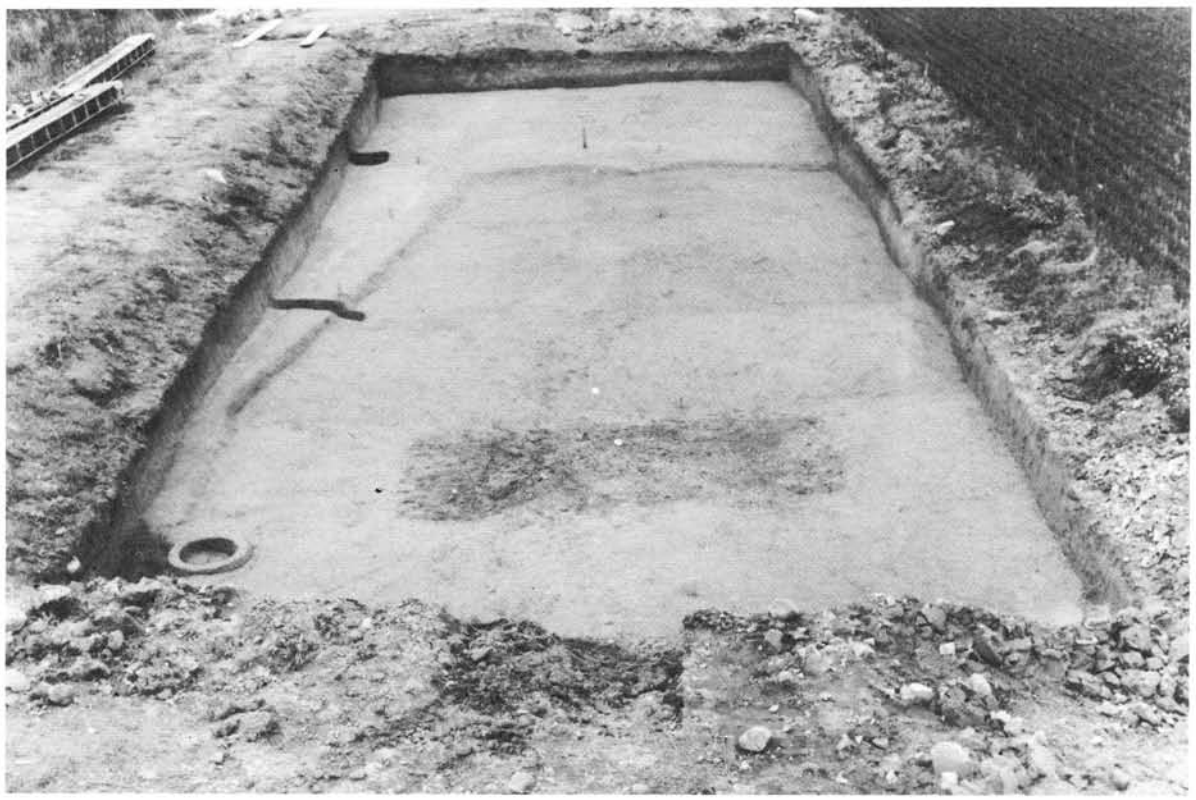
代まで各時代の遺物がみられる。また、第Ⅴ層以下における出土遺物に時代差はなかった。

3．C　地　区

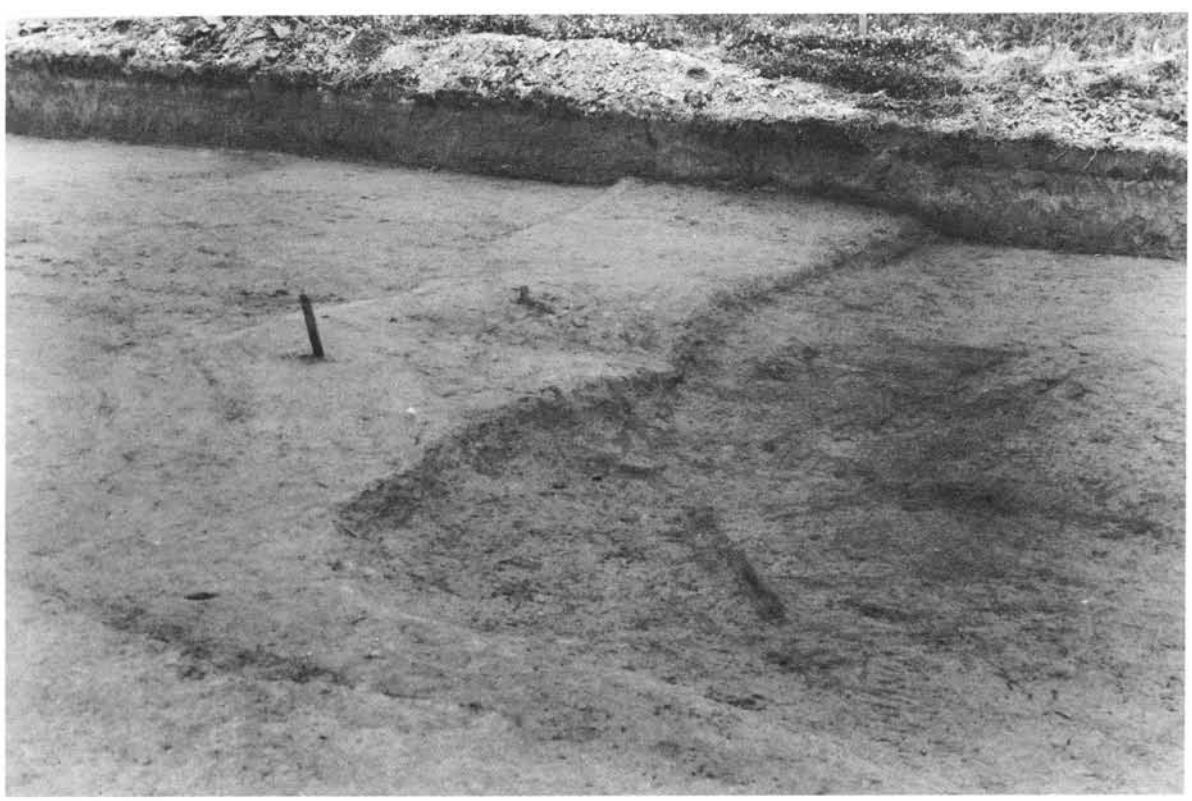
C地区の基本的層序は、第Ⅰ層；表土，第Ⅱ層；耕作土，第Ⅲ層；旧耕作土，第Ⅳ層；黄灰褐色砂質土，第Ⅴ層；灰褐色粘質土，第Ⅵ層；灰褐色砂質土，第Ⅶ層；灰褐色粘質土，第Ⅷ層；淡灰褐色粘土，第Ⅸ層；灰色砂質土である。第Ⅴ層以下が遺物包含層であるが、遺物の量は少なく、かつ細片が多い。B地区同様、各層における出土遺物に時代差はみられず、古墳時代後期を上限として室町時代まで各時代の遺物がみられる。遺構は、長さ約3.4m、幅約0.7cmの溝一条が確認されたが、出土遺物はみとめられなかったので時期は不明である。また、発掘区の北から南へかけて旧自然地形のおちこみがみられた。



第6図　C地区遺構平面図（1：200）



A地区水田跡（北東から）



A地区水田跡畦畔（北から）

Ⅳ　遺　　物

遺物の出土量は少なく整理箱に10箱程であった。また、細片で磨滅したものがほとんどであった。水田跡埋土の遺物をのぞいては遺構に伴う遺物はない。以下、時代をおって述べてみたい。

1．弥生時代の遺物（1）

先端を欠損した石鏃（1）が出土しているのみである。基部は凹基無茎で長三角を呈する。サヌカイト製か。

2．古墳時代の遺物（2～6）

須恵器直口壺（2）、土師器小型壺（3）・甕（4）、埴輪（5～6）が出土している。（2）は口径9.6cmで、口縁部の破片である。短いが鋭い凸帯を2本めぐらし、その間に7条、下に12条、各々櫛描波状文を施している。細砂、雲母を含み灰色を呈している。（3）は磨滅が著しいが口径7.4cmで細砂を含む。（4）は、「く」字形に外反する口縁部の破片で口径17.4cm、細砂・雲母を含み淡茶褐色を呈する。（5）は、円筒埴輪のタガの部分と思われるが、磨滅が著しい。（6）は不明である。

3．奈良時代の遺物（7～21）

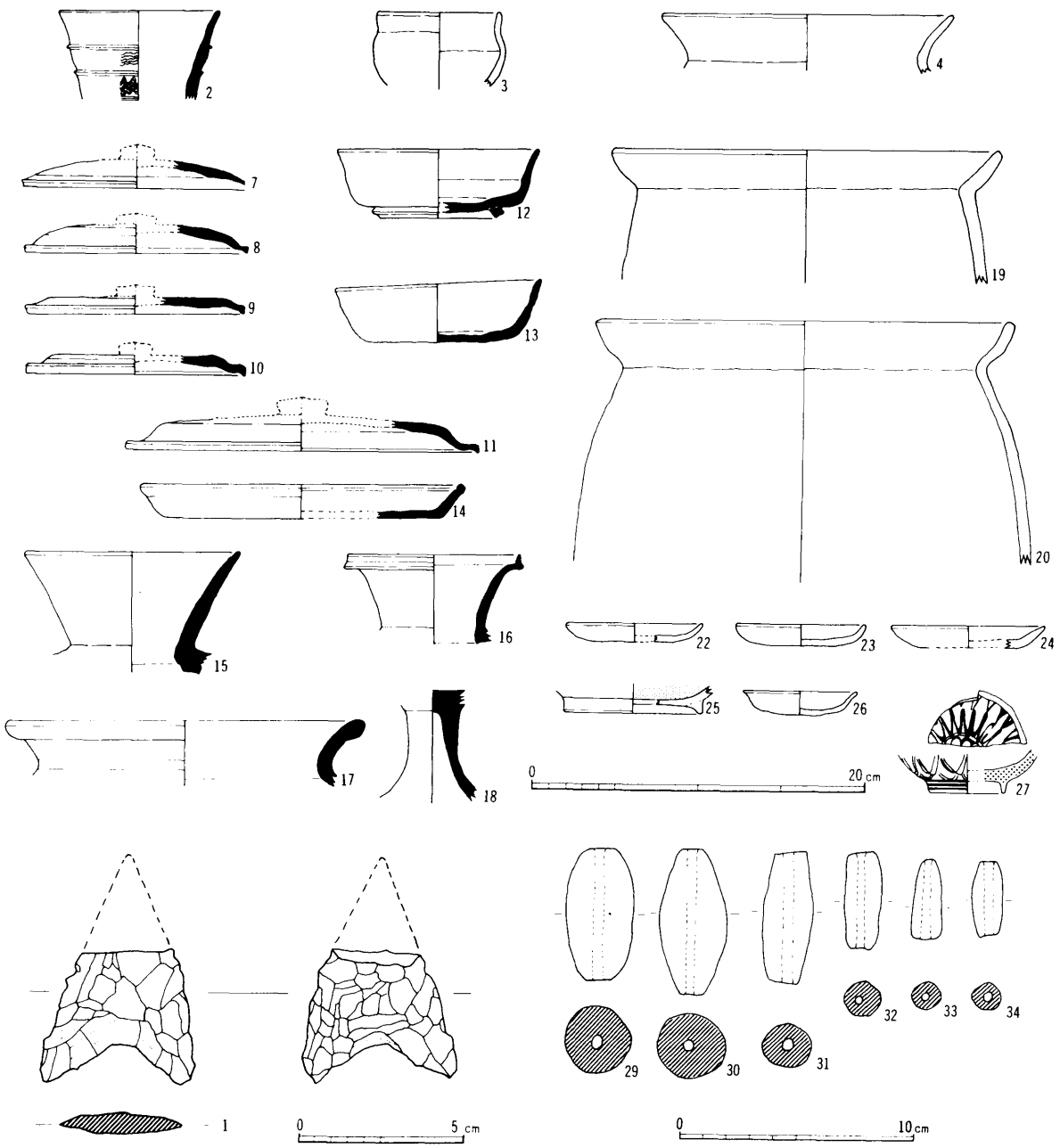
須恵器

蓋（7～11）・杯（12・13）・皿（14）・平瓶（15）・長頸壺（16）・甕（17）・高杯（18）などがある。蓋は、頂部が丸く口縁部が屈折しないもの（7）と平らな頂部及び屈折する口縁部をもつもの（8～11）とがある。口径は（11）が21.2cmで他は13cm～13.6cmである。（7～10）は灰色を呈し、（11）は淡青灰色を呈する。杯は（12）のように高台がつくものと（13）のように平底のものとがある。どちらも口径は12cm前後である。（12）の口縁部は外方に開き、端部でわずかに外反する。高台は断面方形のものが底部端より内側にはりつけられる。灰色を呈する。（13）の口縁部は外方に開き、底部との境は丸みをもつ。底部はヘラ切りのままである。暗灰色を呈する。皿（14）は、口径19cm、平底と斜め上に開く短い口縁部からなる。口縁端部はやや外反して肥厚する。内側に1条の沈線がみられる。灰色を呈する。平瓶（15）の口縁部は外方へ開く。口径12.6cmで広口である。灰色を呈する。長頸壺（16）の口縁部は短かく端部で外方へ屈曲させ、さらに上方に曲げ段をなす。灰色を呈する。甕（17）の口縁部は短かく外方へ開き、端部は丸くふくらむ。淡青灰色を呈する。高杯（18）の基部は比較的細く、下方へゆるやかに外反する。

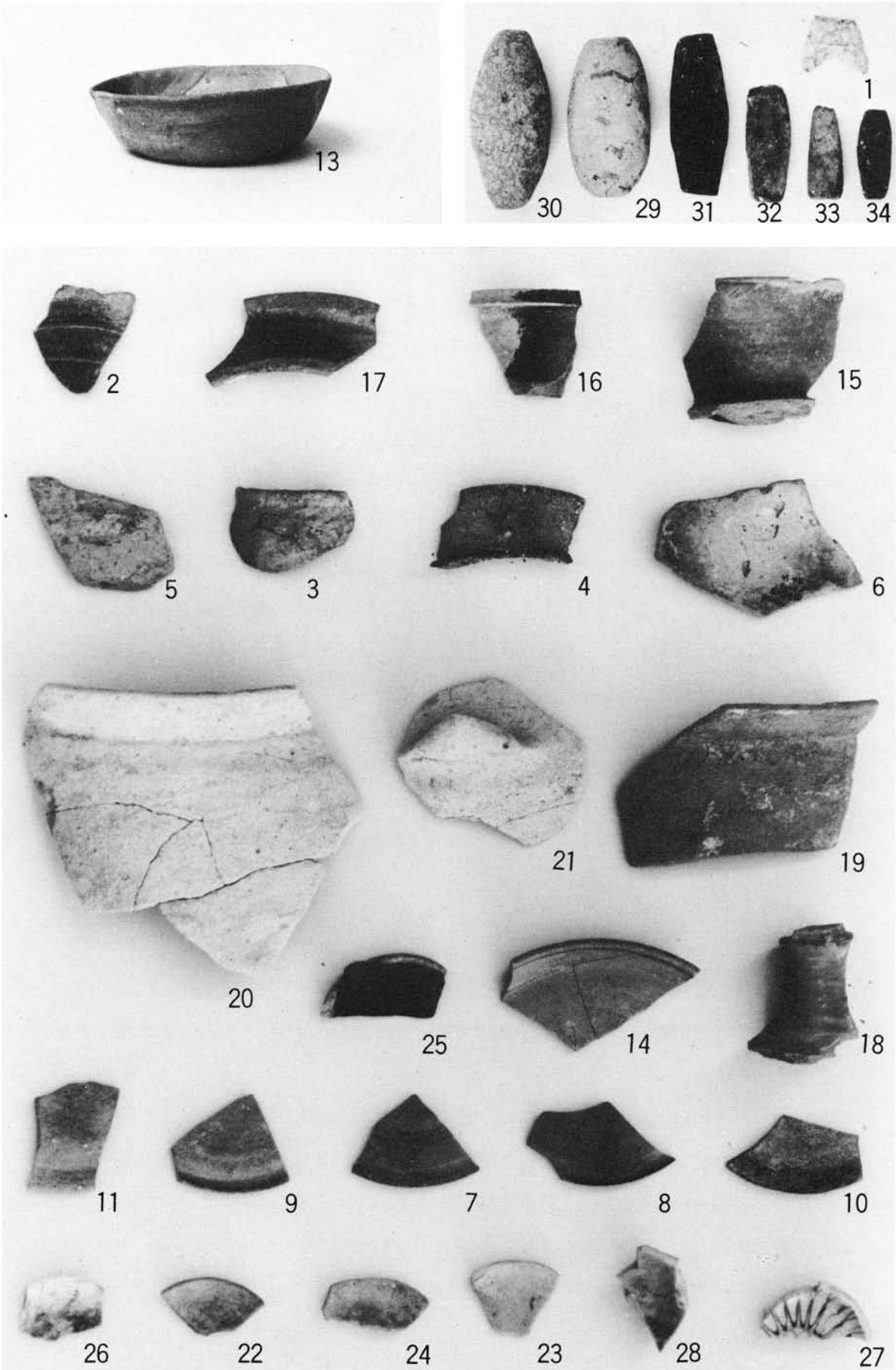
灰色を呈する。（7～18）はすべて細砂を含み、ロクロ回転方向は、（13）が右まわり、（14）が左まわり、他は不明である。

土師器

蓋・杯・甕などがあるが、甕のみ図示しえた。（19）は口径22.9cm、（20）は口径24.2cmである。いずれも体部から「く」の字形に外反する口縁部は、中央がやや肥厚して内弯ぎみにのびる。磨滅がはげしく細かく観察することはできないが、（19）は体部内外面と口縁部内面に、（20）は体部内外面にハケ目がわずかに観察できたが図示しえなかった。また、（21）は、体部につく把手である。



第7図　出土遺物実測図（1；1：1、2～4、7～20、22～27；1：4、29～34；1：3）



出土遺物（1．29～34；1：2、他は1：3）

4．平安時代以降の遺物（22～34）

土師器皿（22～24）。口径は、7.5cm～9.2cm。器高は1.3cm前後である。手づくねによるもので口縁端部のみヨコナデされている。いずれも細砂を含み淡茶褐色を呈する。

黒色土器（25）は、底部のみの破片で底部径8.2cmである。全様はわからないが、内面のみに炭素が吸着しており、ヘラミガキされている。外面は淡茶褐色を呈する。高台は断面逆台形でやや外方へひらくものがはりつけられている。

瓦器(26)は、A地区水田跡埋土をはじめ、磨滅した椀・皿の細片が出土しているが、図示しえたのは、皿（26）のみである。口径は6.8cmで口縁部内外面はヨコナデされ端部はやや外反する。内底面には暗文を施しているようであるが燻が剥離し鮮明でない。底部外面はオサエのままである。

染付椀（27）は、底部の破片で全様は明らかでないが、底部径4.4cm、灰色で緻密な胎土で、呉須により文様を内外面にあしらっている。

青磁椀（28）は、底径6cmで、口縁部は途中までであるが、僅かに内弯しながら外方に張り出す。胎土は緻密で灰白色を呈し、釉厚は1mmでくすんだ灰緑色である。高台外面まで釉がかかり底部外面にも部分的にみられる。見込み部分には文様がみられるが全体はあきらかではない。

土錘（29～34）は、長さ3.2cmから6.9cmまでの各種の大きさがある。長いものは径も大きく丸みをもつ。（27～30）は淡黄茶色、（31～34）は黒茶褐色を呈し、砂粒がめだつ。（31）の両端はまっすぐ切られている。

V　結　　語

竹ノ下遺跡の調査では、水田跡の遺構が確認されたが、県下における検出例としては、上野市北掘池遺跡①（古墳時代前期）、二見町・荘遺跡②（室町時代前期～中期）・上野市・森寺遺跡③（中世）と三例が知られている。

今回検出された水田跡は、まず、第Ⅴ層；黄灰褐色粘質土が堆積し、さらに第Ⅳ層；黄灰色砂質土が堆積したことにより、水田は完全に埋没したことが層位的にわかる。第Ⅳ層中及び第Ⅴ層中には、細片でなおかつ磨滅した瓦器や土師器が含まれていたが、両者において遺物には時期差はなく、両者の堆積には時間的に差は少ないと考えられる。

今回検出された水田跡の畦畔は南北軸で約N15°Eの傾きをもつ。下郡―上郡の条里は南北軸でN2°Eとされており④、発掘調査面積が狭いため畦畔の一部を確認しただけにすぎないが、条里の方向とは一致しない。また、排水施設、水口等は検出されていないなどの問題を考えるとなお多

くの疑問を残すところであり、今後の水田跡検出例に期するところが大きい。

竹ノ下遺跡出土の遺物は、出土量もそれほど多くなくかつ細片で磨滅したものがほとんどであった。（２～６）は、古墳時代後期に位置づけられる。（４）～（18）は奈良時代後半に位置づけられる。（19～20）の甕の内弯気味になる口縁部の形態はいわゆる近江型の甕[⑤]に似ている。（25）の黒色土器は、内面だけ炭素が吸着する黒色土器Ａ類[⑥]である。その他の遺物では、（１）は弥生時代、（28）は鎌倉時代中頃と思われる。その他は不明である。報告書に掲載できなかった細片も含めると奈良時代末の遺物が比較的多かった。水田跡埋土から出土した遺物をのぞくと他はすべて包含層出土の遺物である。

竹ノ下遺跡の対岸にあたる矢田川右岸の地域では、昭和58年から昭和59年にかけて行なわれた上野市教育委員会・同遺跡調査会の調査により、弥生時代後期から古墳時代の一大農業集落の存在が明らかになっている。[⑦]一方、矢田川左岸の地域では、北部の標高 200 m 程の丘陵上に古墳がみられるが、この時期の集落跡等は現在のところ知られていない。奈良時代の遺跡はこの丘陵北麓の標高150～160 m 程の段丘上に彼岸台遺跡などが知られており、竹ノ下遺跡もこのような立地の遺跡のひとつであると考えられる。

註

① 谷本鋭次・吉水康夫・駒田利治・山田猛『三重県上野市　北掘池遺跡発掘調査報告　第一分冊』三重県教育委員会　1981

② 新田洋『度会郡二見町　荘遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1980

③ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報14』1984

④ 福永正三『秘蔵の国』1972

⑤ 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究 106 』1980

⑥ 田中琢「古代・中世における手工業の発達　Ⅰ窯業（4）畿内」『日本の考古学Ⅵ』1967

昭和60(1985)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告71

竹ノ下遺跡発掘調査報告

1985年3月

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　東海印刷株式会社